

# 日本人 EFL 学習者の英語学習方略に関する研究(9) : 語彙学習方略と関連諸要因との関係について

北 條 礼 子\*  
(平成12年5月30日受理)

## 要 旨

本研究の目的は、日本人 EFL 学習者(高校生)が用いている語彙学習方略を下位分類し、その上でその下位分類と関連諸要因がどのように関係しているのかを明らかにすることである。調査は新潟県内の公立高校3年生 151名を対象に1999年4月に実施した。データは因子分析、回帰分析により分析した。まず因子分析の結果、語彙学習方略5因子、学習スタイル2因子、性格特性5因子、動機づけ4因子を抽出した。次に回帰分析の結果、語彙学習方略の使用を促すのは、関連諸要因の内容は、語彙学習方略5因子それぞれで異なるが、動機づけと性格特性の諸因子であることが明らかになった。

## KEY WORDS

学習方略	learning strategy	語彙学習方略	vocabulary learning strategy
学習スタイル	learning style	性格特性	personality
動機づけ	motivation	英語教育	English education
語学教育	language education		

## 1. 研究の背景

語彙指導は学習者まかせであることが多いことが報告されている(Oxford & Scarcella, 1994)が、Nation(1990)は多数の低頻度語が存在することとその種の語の使用が限られていることから、これらの語を個別に教授するより、学習するための方略を学習者に指導することが最善であるとの見解を示している。さらに、学習者個人個人によって違いがあることを認めながらも、学習者が自分で語彙を学習するための方略を指導する必要性が報告されている(Coady, 1997; O'Malley & Chamot, 1990)。実際、語彙そのものばかりでなく語彙学習方略に関する研究において多くの余地が残されていることが指摘されている(Gu & Johnson, 1996)。

これまで語彙学習方略についてはいくつの下位分類が提示されているが、Nation(1990)は3つの方略(文脈内の意味推測、記憶術利用、接頭辞・語幹・接尾辞利用)をあげ、Gu & Johnson(1996)は7つの方略(メタ認知方略、推測方略、辞書方略、メモ方略、記憶リハーサル方略、記憶符号化方略、活動方略)を示している。

さて、日本人学習者を対象とした語彙学習方略に関する実証研究はそれほど多いとはいえない状況であるが、姉崎(1999)は中学3年生99名が用いている語彙学習方略の下位分類を試み、

---

\* 言語系教育講座

類似性着目、反復練習、文中暗記、学習順序決定の4方略を抽出している。また、語彙学習方略と関連諸要因との関係を調べた研究として、矢吹(2000)は、高校1年生158名、高校3年生88名を対象とし、その語彙と個人差(動機づけ、性格、学習スタイル、学習経験)、状況的・社会的要因としての性差、語彙レベルとの関係を明らかにしようとした。その結果、語彙学習方略について単語習得努力、類似性着目、未知語調査、未知語推測、興味語調査、文脈重視意味選択の6因子を抽出し、また統合的動機づけと冒険心が語彙学習方略使用を促す傾向があることを報告している。

以上をみても日本人学習者を対象とした語彙学習方略の研究はこれから増加するものと予想されるが、語彙学習方略の分類ばかりでなく関連諸要因との関係を明らかにしようとする、さらなる研究の積み重ねが必要であろう。

## 2. 研究の目的

本研究の第一の目的は、日本人 EFL 学習者(高校生)が用いている語彙学習方略の下位分類を明らかにすることである。第二の目的は関連諸要因の下位分類を明らかにすることである。第三の目的は語彙学習方略各因子と関連諸要因との関係を明らかにすることである。

なお、ここでいう語彙学習方略関連諸要因とは Ellis(1996)の学習方略に関するモデルを基に、選び出した要因である。

## 3. 研究の方法

3.1 対象者：新潟県内の公立高校3年生 151名

3.2 測定具：計59項目から成る5段階尺度形式のアンケート。内訳は、①英語の語彙学習方略に関する30項目、②英語の学習スタイルに関する6項目、③性格特性に関する15項目、④英語学習の動機づけに関する8項目である。また調査実施校から語彙テストの得点が得られた。ここでの語彙学習方略の調査項目は、Rubin and Thompson(1994)が紹介している語彙学習方略を基にした17項目と矢吹(1999)の語彙学習方略に関する調査結果から日本人学習者がよく用いていることがわかった13項目を加えた計30項目である。前者については、筆者が日本語になおし、調査協力校の教諭の助言を得て、高校生の現状に適するように、日本語の表現等を一部修正した。

3.3 調査実施時期：1999年4月

3.4 手続き：約15分の実施時間で、集団調査を行った。本研究で扱う部分について述べると、回答形式は①については「1.まったくそうしない、2.めったにそうしない、3.どちらでもない、4.ときどきそうする、5.いつもそうする」の5段階で、②から④については「1.まったくそう思わない、2.どちらかというと思わない、3.どちらでもない、4.どちらかというと思ふ、5.まったくそう思ふ」の5段階で、1～5点までの得点化を行って項目ごとに集計した。

3.5 分析方法：因子分析、回帰分析

## 4. 研究の結果

### 4.1 語彙学習方略

#### 4.1.1 平均値・標準偏差

日本人 EFL 高校生が用いている語彙学習方略に関する30項目への回答について、「いつもそうする」を5点、「まったくそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表1は各項目について全体と性別の平均と標準偏差を示したものである。以上の30項目のうち、平均±標準偏差の値が得点範囲(1-5)を越えた項目8の質問項目を、天井効果が生じたものと判断し、また項目23, 25の質問項目をフロア効果が生じたものと判断し、以上の計3項目は因子分析に持込まなかった。

表1：語彙学習方略の平均値と標準偏差(N=151)

項目	全体(N=151)		男子(N=56)		女子(N=95)		項目	全体(N=151)		男子(N=56)		女子(N=95)	
	平均	SD	平均	SD	平均	SD		平均	SD	平均	SD	平均	SD
1	4.05	0.79	4.02	0.92	4.06	0.71	16	3.76	0.93	3.80	1.07	3.74	0.84
2	3.72	1.20	3.89	1.19	3.62	1.20	17	3.36	1.18	3.13	1.29	3.49	1.09
3	3.30	1.17	3.11	1.14	3.42	1.18	18	2.28	0.87	2.32	0.99	2.25	0.80
4	3.72	1.00	3.63	1.09	3.78	0.95	19	2.70	1.13	2.71	1.22	2.68	1.08
5	2.65	1.09	2.73	1.14	2.60	1.07	20	3.46	0.94	3.39	1.02	3.51	0.90
6	2.89	1.18	2.86	1.31	2.92	1.10	21	2.88	1.03	2.77	1.03	2.95	1.04
7	3.05	1.17	3.16	1.23	2.98	1.13	22	3.22	1.26	3.13	1.31	3.27	1.23
8 <sup>△</sup>	4.10	1.09	3.98	1.23	4.17	1.00	23 <sup>▽</sup>	1.73	0.89	1.61	0.80	1.80	0.94
9	2.32	1.02	2.32	1.10	2.33	0.98	24	2.32	0.98	2.39	1.11	2.27	0.90
10	2.35	1.03	2.46	1.19	2.28	0.92	25 <sup>▽</sup>	1.78	0.94	1.71	0.87	1.82	0.98
11	3.00	1.05	2.98	1.20	3.01	0.96	26	2.18	1.01	2.05	1.05	2.25	0.98
12	2.87	1.03	2.79	1.11	2.92	0.99	27	2.48	1.15	2.27	1.18	2.61	1.11
13	3.21	1.09	3.23	1.21	3.20	1.03	28	2.34	1.06	2.29	1.17	2.37	0.99
14	2.95	1.24	2.70	1.35	3.11	1.15	29	2.78	1.17	2.71	1.23	2.82	1.13
15	2.72	1.04	2.61	1.09	2.78	1.01	30	2.66	1.21	2.46	1.31	2.78	1.14

△ 天井効果を示した項目, ▽ フロア効果を示した項目

#### 4.1.2 因子分析結果

英語の語彙学習における語彙方略に関する30項目の得点について、天井効果を示した項目8とフロア効果を示した項目23, 項目25の計3項目を削除した後の27項目の得点について、共通性の初期値をSMCとした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて5因子解を適当と判断した。その結果として、再度5因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は92.30%であった。次に5因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.50以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表3に示すとお

りである。

表3：バリマクス回転後の因子負荷量(英語語彙方略：N=151)

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V	共通性
項目27	<u>0.70074</u>	0.19733	0.07653	0.18238	-0.05084	0.571680
項目29	<u>0.69617</u>	-0.05026	0.23448	0.00287	0.12072	0.556735
項目26	<u>0.69406</u>	0.11011	0.16987	0.25540	-0.03365	0.589065
項目24	<u>0.62543</u>	-0.09662	0.22435	0.11040	-0.02685	0.463733
項目28	<u>0.59245</u>	0.09834	0.13049	-0.03426	0.10934	0.390820
項目10	<u>0.55944</u>	0.06185	0.14321	0.33476	0.19860	0.488811
項目30	0.43765	0.00541	0.02310	0.17050	0.25955	0.288536
項目9	0.42821	-0.18284	0.17325	0.36267	0.19194	0.415184
項目18	0.39711	0.03505	0.30198	0.39635	0.21067	0.451589
項目4	0.07570	<u>0.70117</u>	0.11287	0.03380	0.22163	0.560370
項目20	-0.02402	<u>0.65307</u>	0.08390	0.06931	0.21981	0.487234
項目3	0.18920	<u>0.62457</u>	-0.04438	0.00136	-0.09026	0.436004
項目16	-0.15848	<u>0.50938</u>	0.09452	0.19275	0.05372	0.333553
項目11	0.18889	-0.05364	<u>0.67327</u>	0.14663	0.08427	0.520444
項目21	0.20599	0.04371	<u>0.66132</u>	0.16452	0.00798	0.508813
項目12	0.22034	0.16200	<u>0.60297</u>	0.06321	0.17615	0.473385
項目6	0.14479	0.12723	0.47702	0.18222	0.14305	0.318366
項目2	0.09610	0.37280	0.39985	0.01958	0.21515	0.354774
項目7	0.10802	0.08784	0.11852	<u>0.54170</u>	0.15293	0.350259
項目15	0.20286	0.26199	0.05864	<u>0.53329</u>	0.04350	0.399522
項目5	0.27153	-0.17697	0.19636	<u>0.50990</u>	0.14376	0.424272
項目19	0.16235	0.17406	0.34242	0.34509	-0.22540	0.343797
項目14	0.01274	0.13104	0.10207	0.19151	0.06129	0.068185
項目17	0.08641	0.34941	0.15951	0.21514	<u>0.55693</u>	0.511449
項目1	0.21927	0.18182	0.05388	-0.01107	<u>0.52415</u>	0.358895
項目22	0.23526	0.22880	0.04081	0.23057	0.44946	0.364540
項目13	-0.05653	-0.02703	0.20278	0.14152	0.36005	0.194709
説明分散	3.53636	2.22837	2.22645	1.78407	1.44947	11.224723

(注) 網かけされた数値は 0.50 以上。

因子 I に対して .50以上の負荷量を示した項目を表4にあげた。因子 I には項目27, 29, 26, 24, 28, 10の計6項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、意味のまとまり、派生語、役割や機能、同じ文字や発音で始まる語、品詞などの記憶術を利用する内容であるので、「記憶術利用」と命名した。

次に因子 II に対して .50以上の負荷量を示した項目を表5にあげた。因子 II には項目4, 20, 3, 16の計4項目が含まれていた。これらの項目内容をみると、教師の指示や説明に従ったり、おぼえやすそうだったり、テストに直接関係のある単語をおぼえるという、いわば条件つきで選択的に単語をおぼえるというものであるので、「選択的単語記憶」と命名した。

表4：因子I「記憶術利用」の負荷の大きい項目とその内容(N=151)

項目	負荷量	項目の内容
27	0.70	意味のまとまりのある単語をまとめておぼえる
29	0.70	派生語をいっしょにおぼえる(名詞と形容詞など)
26	0.69	役割や機能で関連している単語をまとめておぼえる
24	0.63	私は同じ文字, 同じ発音で始まる単語をまとめておぼえる
28	0.59	品詞(名詞, 動詞, 形容詞など)にわけて単語をおぼえる
10	0.56	私は知らない単語が合ったら, 同意語や反意語が自分の頭に入っているかどうか考えてみる

表5：因子II「選択的単語暗記」の負荷の大きい項目とその内容(N=151)

項目	負荷量	項目の内容
4	0.70	私は英語の先生が, おぼえるようにといった単語をおぼえる
20	0.65	私は先生が授業で説明した単語をおぼえるようにする
3	0.62	私はおぼえやすそうな単語からおぼえる
16	0.51	私はテストに直接関係のある単語をおぼえる

さらに因子IIIに対して.50以上の負荷量を示した項目を表6にあげた。因子IIIには項目11, 21, 12の計3項目が含まれていた。これらの項目内容は, 単語をおぼえるのに英文と一緒におぼえるというもので、因子IIIは「英文利用暗記」と命名した。

表6：因子III「英文利用暗記」の負荷の大きい項目とその内容(N=151)

項目	負荷量	項目の内容
11	0.67	単語をおぼえるとき, その語がでてきた文脈(句や文など)といっしょにおぼえる
21	0.66	単語をおぼえるとき, 私はその単語が使われている文をおぼえる
12	0.60	私は単語をおぼえるとき, 何度も英文(教科書などの)を読む

また因子IVに対して.50以上の負荷量を示した項目を表7にあげた。因子IVには項目7, 15, 5の計3項目が含まれていた。これらの項目内容に共通しているのは, 自分が既に知っているスペリングや発音と結びつけて単語をおぼえたり意味を考えるものなので、「既知情報利用」と命名した。

表7：因子IV「既知情報利用」の負荷の大きい項目とその内容(N=151)

項目	負荷量	項目の内容
7	0.54	私は単語をおぼえるとき, 自分がすでに知っている単語で, スペリング(つづり, 書き方のこと)など見た感じが似ている単語と結びつけておぼえる
15	0.53	私は単語をおぼえるとき, 自分がすでに知っている単語で, 発音が似ている単語と結びつけておぼえる
5	0.51	私は知らない単語があったら, 意味を調べる前に意味を考えてみる

最後に因子Vに対して、.50以上の負荷量を示した項目を表8にあげた。因子Vには項目17の計2項目が含まれていた。これらの項目に共通するのは、単語をくりかえしおぼえたり、意味を調べるといった内容なので、因子Vは「意味調べ・暗記」と命名した。

表8：因子V「意味調べ・暗記」因子の負荷の大きい項目とその内容(N=151)

項目	負荷量	項目の内容
17	0.56	私は単語カードや単語リストに書いた単語のうち、わからない単語を何度もくりかえしておぼえる
1	0.52	私は知らない単語があったら意味を調べる

## 4.2 語彙学習方略関連諸要因（学習スタイル、性格特性、動機づけ、性差）

### 4.2.1 平均値・標準偏差

日本人EFL高校生が用いている語彙学習方略関連諸要因である学習スタイル6項目、性格特性15項目、動機づけ8項目の計29項目への回答について、「いつもそうする」を5点、「まったくそうしない」を1点とし、中間段階を1点きざみで得点化した。表9は各項目の対象者全員と男女別の平均と標準偏差を示したものである。以上の29項目のうち、平均±標準偏差の値が得点範囲（1－5）を越えた、性格特性の項目2を天井効果が生じたものと判断し、また動機づけの項目7の質問項目をフロア効果が生じたものと判断し、以上の2項目は因子分析に持込まなかった。

### 4.2.2 因子分析結果

まず学習スタイル6項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて2因子解を適当と判断した。その結果として、再度2因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は50.16%であった。次に2因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.60以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表10に示すとおりである。その結果、第I因子には項目1, 2, 3, 5が含まれ「視聴覚型」と命名した。第II因子には項目4, 6が含まれ、「体験型」と命名した。

次に性格特性15項目の得点については、天井効果を示した項目2を削除した後の14項目の得点について、共通性の初期値を1とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて5因子解を適当と判断した。その結果として、再度5因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマクス回転後、各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は62.10%であった。次に5因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値.50以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。バリマクス回転後の因子パターンは表11に示すとおりである。その結果、第I因子には項目6, 1, 9が含まれ「冒険心」と命名した。第II因子には項目11, 3が含まれ「自尊心」と命名した。第III因子には項目8, 15, 5が含まれ「社交性」と命名した。第IV因子には項目10, 14が含まれ、「権威主義」と命名した。因子Vには項目7と13が含まれ「あいまい性への耐性」と命名した。

表9：学習スタイル、性格特性、動機づけに関する項目の平均値と標準偏差(N=151)

項目	全体(N=151)		男子(N=56)		女子(N=95)		
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
学習 スタイル	1	2.81	1.20	2.66	1.24	2.89	1.18
	2	3.05	1.06	2.98	1.18	3.09	0.98
	3	3.02	1.23	2.89	1.32	3.09	1.18
	4	3.23	1.01	3.21	1.06	3.24	0.99
	5	3.05	1.02	3.11	1.11	3.01	0.96
	6	3.30	0.93	3.39	1.07	3.25	0.84
性 格 特 性	1	2.60	1.13	2.71	1.20	2.53	1.08
	2 <sup>△</sup>	4.19	0.87	3.96	1.06	4.32	0.72
	3	2.56	0.88	2.66	0.96	2.51	0.82
	4	3.60	1.21	3.55	1.31	3.62	1.15
	5	2.91	1.15	2.59	1.09	3.11	1.14
	6	2.78	1.10	2.96	1.13	2.67	1.08
	7	3.25	1.34	3.39	1.36	3.16	1.32
	8	3.11	1.14	3.18	1.22	3.06	1.10
	9	3.14	1.22	3.61	1.23	2.86	1.14
	10	2.72	1.22	2.88	1.28	2.62	1.19
	11	2.76	1.00	2.89	1.09	2.68	0.94
	12	1.99	0.94	2.11	0.97	1.93	0.93
	13	3.26	1.27	3.36	1.38	3.20	1.21
	14	3.05	1.30	2.88	1.29	3.15	1.30
	15	2.61	1.13	2.66	1.23	2.58	1.08
動 機 づ け	1	3.25	1.18	2.93	1.29	3.44	1.07
	2	3.54	1.16	3.29	1.33	3.68	1.02
	3	3.36	1.11	3.43	1.19	3.33	1.07
	4	3.26	1.08	3.18	1.27	3.32	0.96
	5	3.80	1.13	3.79	1.19	3.81	1.09
	6	3.26	1.13	3.27	1.27	3.26	1.04
	7 <sup>▽</sup>	2.08	1.11	2.21	1.23	2.00	1.03
	8	2.11	1.09	2.20	1.24	2.06	1.00

△ 天井効果を示した項目, ▽ フロア効果を示した項目

表10：バリマクス回転後の因子負荷量(学習スタイル：N=151)

	因子 I	因子 II	共通性
項目1	0.72203	0.12914	0.53801
項目2	0.70591	0.09941	0.50819
項目3	0.64417	0.15674	0.43952
項目5	0.60737	-0.19897	0.40848
項目4	-0.02303	0.79023	0.62500
項目6	0.13636	0.68692	0.49046
説明分散	1.82261	1.18705	3.00966

(注) 網かけされた数値は 0.60 以上。

表11：バリマクス回転後の因子負荷量(性格特性：N=151)

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	因子 V	共通性
項目6	0.86215	0.13312	0.01098	-0.00258	0.06445	0.76530
項目1	0.81610	-0.01719	0.03692	-0.18537	-0.09661	0.71137
項目9	0.51392	0.28847	-0.14370	0.25689	0.19212	0.47087
項目11	0.04070	0.84401	0.00153	0.00287	0.21521	0.76034
項目3	0.14011	0.81988	-0.17856	0.03026	-0.08553	0.73195
項目12	0.36939	0.46525	-0.07022	-0.30136	-0.08806	0.45641
項目8	-0.07129	0.09889	0.79151	0.11259	0.25161	0.71734
項目15	0.05927	-0.28943	0.65244	-0.00898	-0.20229	0.55397
項目5	0.00882	0.08706	-0.72971	-0.14466	0.08495	0.56828
項目10	-0.00717	0.02482	0.03378	0.89332	-0.14552	0.82100
項目14	-0.20304	-0.03619	0.34178	0.63390	0.30581	0.65470
項目7	-0.06170	0.04501	0.02308	-0.13363	0.79507	0.65636
項目13	0.12883	-0.21709	0.18156	0.39054	0.50493	0.50416
項目4	0.08153	0.18934	-0.26759	0.11093	0.44274	0.32243
説明分散	1.90817	1.89031	1.86665	1.60831	1.42103	8.69447

(注) 網かけされた数値は 0.50 以上。

表12：バリマクス回転後の因子負荷量(動機づけ：N=151)

	因子 I	因子 II	因子 III	因子 IV	共通性
項目2	0.93290	-0.09887	0.01665	-0.01554	0.88060
項目1	0.91647	-0.06699	0.17000	0.02385	0.87388
項目5	-0.06026	0.92380	0.05256	-0.02993	0.86070
項目6	-0.17071	0.74347	0.09401	0.36677	0.72525
項目4	0.12889	-0.01062	0.92863	0.00226	0.87909
項目3	0.05682	0.47223	0.60174	0.24033	0.64609
項目8	0.02265	0.15188	0.08436	0.96251	0.95713
説明分散	1.76336	1.66661	1.27234	1.12043	5.82273

(注) 網かけされた数値は 0.60 以上。



さらに動機づけ 8 項目の得点については、フロア効果を示した項目 7 を削除した後の 7 項目の得点について、共通性の初期値を 1 とした反復主因子法を実行し、後続因子との固有値の差に基づいて 4 因子解を適当と判断した。その結果として、再度 4 因子解を仮定した反復主因子法を実行した。バリマックス回転後、各項目の因子負荷量を得た。累積説明率は 83.18% であった。次に 4 因子の解釈にあたり、回転後の因子パターンにおいて絶対値 .60 以上の因子負荷量を示した項目の内容を中心として因子を解釈することにした。

バリマックス回転後の因子パターンは表 12 に示すとおりである。その結果、第 I 因子には項目 2, 1 が含まれ「統合的動機づけ」と命名した。第 II 因子には項目 5, 6 が含まれ「成績向上意識」と命名した。第 III 因子には項目 4, 3 が含まれ「道具型動機づけ」と命名した。第 IV 因子には項目 8 が含まれ「プライドの充足」と命名した。

#### 4.3 語彙力別の語彙方略と関連諸要因の関係

調査協力校から得られた語彙テストの得点を基に、語彙方略得点（標準因子得点）を目的変数とし、学習スタイル 2 因子、性格特性 5 因子、動機づけ 4 因子（各標準因子得点）を予測変数としたフォワード・セレクション方式のステップワイズ回帰分析をおこなった。回帰分析の結果は以下の表 13～表 16 に示すとおりである。

表 13 から、「記憶術利用」因子の使用は「統合的動機づけ」に喚起されることが示唆された。

表 13：語彙方略因子 I 「記憶術利用」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R <sup>2</sup>	累積	回帰係数	F
1	動機づけ因子 I 「統合的動機づけ」	0.116	0.116	0.26	19.54**

\*\*p < .01

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R<sup>2</sup>)

性格特性因子 II 「自尊心」(0.021), 性格特性因子 III 「社交性」(0.012)

性格特性 I 「冒険心」(0.011), 動機づけ因子 II 「成績向上意識」(0.011)

性差(0.005), 性格特性因子 V 「あいまい性への耐性」(0.003)

性格特性因子 IV 「権威主義」(0.003)

表 14 から、「選択的単語暗記」因子の使用は動機づけの「プライドの充足」に喚起されることが示唆された。

表 14：語彙方略因子 II 「選択的単語暗記」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R <sup>2</sup>	累積	回帰係数	F
1	動機づけ因子 IV 「プライドの充足」	0.029	0.029	0.08	4.50*

\*p < .05

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R<sup>2</sup>)

性格特性因子 II 「自尊心」(0.015), 学習スタイル因子 I 「視覚型」(0.015)

性格特性因子 V 「あいまい性への耐性」(0.011), 性差(0.010)

動機づけ因子 I 「統合的動機づけ」(0.012)

表15から、「英文利用暗記」因子の使用は「自尊心」、「道具的動機づけ」、「冒険心」に喚起されることが示唆された。

表16から、「既知情報利用」因子の使用は「冒険心」、「統合的動機づけ」に喚起されることが示唆された。

表15：語彙方略因子III「英文利用暗記」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測変数	R <sup>2</sup>	累積	回帰係数	F
1	性格特性因子II「自尊心」	0.045	0.045	0.15	6.95**
2	動機づけ因子III「道具的動機づけ」	0.025	0.070	0.15	3.95*
3	性格特性因子I「冒険心」	0.029	0.099	0.16	4.80*

\*\*p<.01 \*p<.05

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R<sup>2</sup>)

動機づけ因子II「成績向上意識」(0.012), 動機づけ因子IV「プライドの充足」(0.008)

動機づけ因子I「統合的動機づけ」(0.007), 学習スタイル因子II「体験型」(0.004)

性格特性因子V「あいまい性への耐性」(0.003)

表16：語彙方略因子IV「既知情報利用」を目的変数とした回帰分析の結果

Step	予測	R <sup>2</sup>	累積	回帰係数	F
1	性格特性因子I「冒険心」	0.084	0.084	0.20	8.96 **
2	動機づけ因子I「統合的動機づけ」	0.030	0.114	0.12	5.90 *

\*\*p<.01 \*p<.05

(注) 以下の因子は選択されなかった (カッコ内 R<sup>2</sup>)

学習スタイル因子II「体験型」(0.016), 性格特性因子III「社交性」(0.016)

動機づけ因子IV「プライドの充足」(0.013), 動機づけ因子III「道具的動機づけ」(0.008)

性格特性因子II「自尊心」(0.009), 性格特性因子IV「権威主義」(0.008)

動機づけ因子II「成績向上意識」(0.003)

最後に語彙方略因子V「意味調べ・暗記」を目的変数とした回帰分析の結果、5%レベルで選出された因子はなかった。

## 5. 考 察

### 5.1 語彙方略について

本研究では日本人学習者(高校生)の用いている語彙方略として、「記憶術利用」、「選択的単語利用」、「英文利用暗記」、「既知情報利用」、「意味調べ・暗記」、という5因子が抽出された。

矢吹(2000)は、本研究と同じく日本人高校生を対象とし、彼らの用いている語彙方略を調査したが、その結果として6因子を抽出している。この6因子とは、「単語学習努力」、「類似性着目」、「未知語調査」、「未知語推測」、「興味語調査」、「文脈重視」である。この矢吹の抽出因子と本研究の抽出因子を比較すると、因子名に違いがあるものの、単語の意味を調べたり暗記したり、既に自分が知っている単語と結びつけて単語を憶える工夫や、英文、文脈を利用して単

語をおぼえるという点では内容が共通した因子が見出されたと考えられる。ここから少なくとも、日本人高校生は、単語を中心とし、英文を利用したいいわゆるボトムアップ式の語彙学習をしていることが推察される。

## 5.2 語彙方略関連諸要因について

同様に、学習スタイルについては、「視聴覚型」、「体験型」の2因子が抽出され、性格特性については、「冒険心」、「自尊心」、「社交性」、「権威主義」、「あいまい性への耐性」の5因子が抽出された。さらに動機づけについては「統合的動機づけ」、「成績向上意識」、「道具的動機づけ」、「プライドの充足」の4因子が抽出された。

以上の因子は、筆者がこれまでに行った調査結果(1999)で抽出された因子と比較すると学習スタイルは多少の違いがみられるものの大筋では内容が類似した因子が抽出された一方、性格特性、動機づけについては同一の因子が抽出された。これらの3つの要因については安定した因子が抽出されたと判断される。

## 5.3 語彙方略と関連諸要因の関係について

語彙方略の5要因が関連諸要因とどのように関連しているのかを明らかにするため、回帰分析を行った。その結果は表17に示したが、日本人学習者(高校生)の用いている語彙方略5因子は、関連諸要因のうち以下のとおりにそれぞれの諸要因がかかわっているが、特に、動機づけと冒険心、自尊心にその使用が促されていることがわかった。

表17：語彙方略の使用を喚起する諸要因

語彙方略因子	1%、5%レベルで抽出された要因
因子Ⅰ：「記憶術利用」	統合的動機づけ
因子Ⅱ：「選択的単語利用」	プライドの充足
因子Ⅲ：「英文利用暗記」	自尊心、道具的動機づけ、冒険心
因子Ⅳ：「既知情報利用」	冒険心、統合的動機づけ
因子Ⅴ：「意味調べ・暗記」	なし

Samimy & Tabuse(1992)は、L2学習が成功するかどうかに潜在的に影響を与える要因に関する先行研究を概観し、動機づけと情意要因としての不安、自尊心、冒険心をあげている。本研究でも、語彙方略5因子の使用を喚起する要因として、統合的動機づけ、道具的動機づけ、プライドの充足という動機づけの3要因と自尊心、冒険心が抽出された。この結果は、彼らの指摘を裏付ける結果であると考えられる。

また、Yabuki(2000)は、語彙方略として6因子を抽出したが、特に動機づけの統合的動機づけと性格特性の冒険心がいくつかの語彙方略因子を促しているという調査結果を報告している。

以上から、語彙方略使用に影響を与える要因として、少なくとも動機づけと冒険心、自尊心の存在が確かめられたと言えよう。

最後に、本研究の結果では、語彙方略の使用に性差の影響がみられなかった。これまでの学

習方略に関する先行研究の結果(Oxford 他, 1988; Yabuki,2000)では, 女性の方が学習方略を多く使用することが報告されている。Oxford 他は, この理由として女性が男性に比べて社会的に人との関わりを求め, 社会的, 文化的様式を受け入れ, コミュニケーション能力発達に結びつく傾向が強いことを理由としてあげているが, 本研究の対象者となった高校生の女子生徒はこの傾向が特に強くなかったのかもしれない。この理由についてはさらに研究を積み重ねて, 検討することが必要であると考えられる。

### 参 考 文 献

- Anezaki, T. 姉崎達夫 1999. 「学習方法が日本人中学生の EFL 語彙の学習に及ぼす効果」 研究論集 第14号 上越教育大学大学院学校教育研究科言語系コース (英語) 発行 19-34.
- Coady, J. 1997. L2 Vocabulary Acquisition: A Synthesis of the Research. In Coady, J. and Huckin, T. (eds.), *Second Language Vocabulary Acquisition* (271-290). Cambridge University Press.
- Cohen, A.D. 1998. *Strategies in Learning and Using a Second Language*. Longman.
- Ellis, R. 1996. *The Study of Second Language Acquisition* (2nd ed.). Oxford University Press.
- Gu, Y. and Johnson, R. K. 1996. Vocabulary Learning Strategies and Language Learning Outcomes. *Language Learning*, 46, 4, 643-679.
- Hojo, R. 北條 礼子. 1999. 「日本人学習者の言語 (国語・英語) 学習における学習方略のモデル構築に関する研究」 平成9・10年度科学研究費補助金基盤研究C 研究成果報告書
- Nation, P. 1990. *Teaching and Learning Vocabulary*. Heinle and Heinle.
- O'Malley, J. M., and Chamot, A. U. 1990. *Learning Strategies in Second Language Acquisition*. Cambridge University Press.
- Oxford, R., Nyikos, M., and Ehrman, M. 1988. Vive la Difference? Reflections on Sex Differences in Use of Language Learning Strategies. *Foreign Language Annals*, 21, 4, 321-329.
- Oxford, R., and Scarcella, R.C. 1994. Second Language Vocabulary Learning among Adults: State of the Art in Vocabulary Instruction. *System*, 22, 2, 231-243.
- Rubin, J. and Thompson, I. 1994. *How to Be a More Successful Language Learner* (2nd ed.). Heinle and Heinle.
- Samimy, K. K. & Tabuse, M. 1992. Affective Variables and Less Commonly Taught Language: A Study in Beginning Japanese Classes. *Language Learning*, 42, 3, 377-398.
- Yabuki, Y. 矢吹 洋子. 1999. 「日本人高校生の英語語彙学習方略に関する研究(1)」 関東甲信越英語教育学会第23回山梨研究大会要項 17.
- Yabuki, Y. 2000. *A Study of the Correlations of Learner Characteristics and Vocabulary Level with Vocabulary Learning Strategies of Japanese EFL High School Students*. Unpublished MA thesis presented to Joetsu University of Education.

## A Study of Learning Strategies Used by Japanese EFL Students (9)

Reiko HOJO\*

### ABSTRACT

It has been reported that vocabulary learning and vocabulary learning strategies will be potential areas of study in EFL learning environment. In Japan, however, little empirical research has been done especially on vocabulary learning strategies.

The main purpose of this study is to subcategorize vocabulary learning strategies used by Japanese EFL high school students. The second purpose of the study is to investigate how each subcategory is related with other factors, such as learning style, personality, motivation, and gender.

Firstly, data on the factors mentioned above were gathered from one hundred and fifty-one high school students in April of 1999, using a questionnaire consisting of fifty-nine items as a total. Secondly, the data were analyzed by factor analysis, extracting 4, 2, 5 and 4 factors for vocabulary learning strategies, learning style, personality, and motivation, respectively. Thirdly, regression analysis was administered, using all the factors extracted above and gender. The results revealed that use of each subcategory of vocabulary strategies was evoked by different combination of the factors of personality and motivation.

---

\* Division of Languages: Department of Foreign Languages